1980年代の補習塾における不登校生支援

――八杉晴実の実践に着目して――

田中　佑弥 *

1990年代以降にフリースクールや教育支援センター（適応指導教室）など、学校外の学びの場が本格的に増えていったが、これらに先行して1980年代から不登校生を受け入れたのは補習塾であった。本稿では「学校外で学ぶ子の支援塾全国ネット」を結成した八杉晴実に着目して、1980年代の補習塾における不登校生支援を考察した。八杉の不登校生支援は、単に学校復帰を目的とするものではなかった。補習塾は、子どもたちが互いを気づかいながら学び、保護者たちが語り合いながら教育を問い直す場であった。

キーワード：補習塾、不登校（登校拒否）、学業不振（落ちこぼれ）

はじめに

文部科学省の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によれば、2018年度の不登校児童生徒（小中学生）は過去最多の16万4528人であり、学校に行かない子どもたちへの支援は非常に重要な課題である。近年は、フリースクールや教育支援センター（適応指導教室）が増えてきており、不登校の子どもや保護者たちにとって重要な場となっている（奥地2015など）。

本稿では、不登校生支援の歴史的考察のために、フリースクールや教育支援センターに先駆けて、不登校の子どもたちを受け入れていた補習塾の実践を考察する[(1)]。

フリースクールや教育支援センターは1990年代以降に本格的に広がり始めた。それ以前は、不登校の子どもたちが学校外で通える場はきわめて少なかったなかで、その役割を担っていたのが補習塾であった。

東京都練馬区で東進会という補習塾を自営していた八杉晴実は、1985年に「学校外で学ぶ子の支援塾全国ネット」[(2)]を結成した（八杉 1990a）。下記の入会案内（冒頭部分のみ抜粋）は団体の性格をよく表している。

> 〝子どもの味方〟をし、〝子どもの幸せ〟を中心に考える全国の良心的な私塾の経営者が参加して、研修・交流し、「学校外で学ぶ子の会」[(3)]の支援をします。（「学校外で学ぶ子の会」は不登校・学力不振を皆で考える父母の会です）
>
> 〔会員の姿勢〕
>
> 一、競争原理で子どもを追込まない。
>
> 二、営利追及を第一目的としない。
>
> 三、原則的には小規模塾で、子どもの味方をする。
>
> 〔会員の活動〕
>
> 一、「不登校児」に家庭的な雰囲気で学べる場を地域の塾で提供する。
>
> 二、「学力不振児」（学校で落ちこぼされた子）を塾でわかるところから教える。（八杉 1990a, p.31）

* 武庫川女子大学

学校外で学ぶ子の支援塾全国ネットには、受験競争を主目的としない小規模な補習塾が参加し、「不登校児」や「学力不振児」を受け入れていた。1989 年 10 月時点で学校外で学ぶ子の支援塾全国ネットには 284 の塾が加盟していた[(4)]。発足（1985 年 4 月）から 4 年半のあいだに「不登校児」や「学力不振児」の保護者から約 3500 件の問い合わせがあり、延べ 2800 件の塾紹介を行っている（八杉 1990a, p.44）。

このように学習塾のなかには受験競争を相対化する視点を持つ補習塾も存在したが、それらは個人経営の小さな塾であり、今日においてその実践の全容を知ることは困難である。しかし、「学校外で学ぶ子の支援塾全国ネット」を結成した八杉晴実は、代表的な補習塾の論客として多くの著作（八杉 1983a など）を残しており、その実践を知ることができることから、本稿では八杉の実践に着目する。

1　八杉晴実について

（1）補習塾の開設と運営

1934 年に鳥取県に生まれた八杉は、1953 年に東京教育大学農学部に入学した[(5)]。教師志望であったが、八杉の理科の研究授業を教育実習校の教師たちから否定され、「教師失格」と言われたため、教師にはならなかった（八杉 1975, pp.16-20）。

在学中にアルバイトをしていた「小さなおもちゃ会社」に就職するが、給料が契約よりも少なかったため 1 ヶ月で退職し、その後いくつかの職を転々と経験し、1959 年に東京都練馬区で東進会[(6)]という塾を開設した（八杉 1983b, pp.118-121）。

1968 年に学習指導要領が改訂されると、学校の勉強が分からないと言う子が増えたと八杉は回想している。高校数学の単元であった集合や確率が小学校の算数に移されるなど、特に算数は詰め込みであると受けとめられていた。この頃、塾が東進会の付近でも増えていき、「やがて塾の過当競争となって、子と親の考えは「塾へ行くか行かないか」ということから、次第に「どこの塾へ行かせるか」に移っていった」（八杉 1983b, p.79）。

東進会は「塾のまわりの地域の子だけの、いわゆるできる子もできない子も入り混じった塾」であったが、一部の「できる子」や、さらには東進会に通って「できない子」から「できる子」に変わった子の保護者が子どもたちを進学塾に転塾させていった（八杉 1983b, pp.80-81）。

これにショックを受けた八杉は、保護者宛のプリントを配布した。そこには、「東進会は進学を目的とした塾ではありません。……本当の学びの大切さを、できる子できない子とともに一緒になって追い求める塾を目ざします。……もし、わが子だけが他の子より抜きん出てくれればよい、というお考えを持たれる方はぼくの塾ではおかど違いであることを覚悟してください」と書かれていた（八杉 1983b, pp.83-84）。

八杉は「明日から生徒が減るかもわからんぞ。半分か、いや三分の一になるかも」と考えていたが、矢継ぎ早に電話があり、保護者たちは「今さら何をわかり切（ママ）ったことをプリントするんです」「もっと自信を持って下さいよ」「うちの子は、誰がなんといったって八杉先生んところから離れやしませんよ」と話し、退塾する子は一人もいなかった。「塾をやり続ける中で、この時ほど子どもたちや親たちに勇気づけられたことはなかった」と八杉は述べている（八杉 1983b, pp.84-86）。

（2）遠山啓との出会い

八杉は「T 私塾会」[(7)]に所属していたが、「同業者の集まりは〝いかにすれば一人でも多くの生徒が集まり、やめていく塾生を少なくすることができるか〟という狙いの研修だったり、「八杉先生、できの悪い子は手がかかるでしょ。あんなのとかかわってると塾はつぶれますよ」と教えてくれる先輩もいたりして、よけいにふさぎこんだこともあった」（八杉 1983b, pp.86-87）。

「もっと外へ出てみたい」と思っていたとき、教育雑誌『ひと』（太郎次郎社）に書かれていた言葉に目を見張った。それは『ひと』の「編集会議報」（石田 1973）に掲載された遠山啓（数学者、『ひと』編集代表）の下記の発言である。

塾は子どものためばかりのものではない。おとなが子どもの教育をきっかけにして、もう一度ものの見方を考えなおすという意味がある。だから、学校がよくなったから、塾はいらないというようにはかならずしもいえない。話し合ってみるとたいていの日本人は、長い学校生活のあいだに心に傷をうけている。ある人は小学校で、ある人は中学校で、また、ある人は大学で、自分はダメなんだと思いこまされている。塾づくりはそれをなおして自信を回復する運動だ。（石田 1973, p.77）

その後、八杉は『ひと』の公開編集会議に参加して遠山と出会った（八杉 1983b, p.87）。「編集会議報」（高木 1973）によれば、遠山は下記のように発言した。

公教育の系統からみると、塾は〝もぐり〟みたいにとられているが、それはまちがいだ。日本は明治になってから、兵役・納税とともに教育も義務として上から与えられてきた。だから、学校以外のところは〝もぐり〟だという意識が国民にある。だが、上からの義務としての教育という考えは転換されなければならない。『ひと』のめざす一つのものもこのことだ。現実には、塾のようなものが一方においてさかんになる必要がある。塾こそむしろ教育の本道ではないか（高木 1973, pp.37-38）

当時、学習塾は批判されることが多かったため、遠山の発言に八杉は強く力づけられた[8]。

八杉は「T 私塾会」の研修部長になり、遠山をはじめ、菅龍一、金沢嘉市を講師に招いたが、会員からは「もっとわれわれにメリットのある研修会にしてほしい」というクレームが出た。「塾を文部省公認にしてもらおう」という声も上がり、方向性の違いに落胆した八杉は新たな会を立ち上げることを考えた。「塾の教師が学校の教師と同格で一つの研究会を持つ」という計画を遠山に相談したところ、遠山は賛成した上で「研究会は学問と同じで、自分にやさしく、ひとに厳しいのではダメになるんだね。自己満足や慣れ合いがこわいんだ」と忠告した（八杉 1983b, pp.87-89）。こうして八杉は「わかる子をふやす会」を 1974 年に結成した（八杉 1990a）。

（3）「わかる子をふやす会」の結成

「わかる子をふやす会」は、八杉が「落ちこぼされて困っている子ども達の側に立って勉強を本当にわかるようにしてやろう」と呼びかけ、年 5 回ほど研究会が開催された[9]。

同会の前期（主に 1970 年代）の研究テーマは「わかる授業をどう作るか」「遅れた子の指導」「受験学力と本当の学力」など、「落ちこぼれ」に関わる事柄が中心であった。

後期（主に 1980 年代）の研究会は非行、校内暴力、無気力、登校拒否などが中心テーマとなり、報告者として内田良子（心理カウンセラー）、佐々木賢（定時制高校教員）、松崎運之助（夜間中学教員）、奥地圭子（小学校教員）などが参加していた[10]。

2　補習塾における不登校生支援

八杉の塾（東進会）では 1970 年代は「落ちこぼれ」の子どもたちの学力保障に力を入れていたが、1980 年頃以降は不登校や非行の子どもたちも通うようになった。八杉が著書を刊行していたこともあり全国から相談の電話や手紙があったが[11]、各地からの相談に一人で対応することはできないため、八杉は「わかる子をふやす会」の有志とともに各地の塾に呼びかけ、1985 年に「学校外で学ぶ子の支援塾全国ネット」を結成した。

八杉は何人もの不登校生に関わったが、本稿では八杉（1985b）が詳細に報告している A の不登校経験の概要を述べ、考察する[12]。

（1）A の不登校経験

八杉の塾では、月に 1 回「土曜会」として、塾生や保護者、地域の人びとが集まる食事会を開催していた。A（当時、小学 5 年生、女子）は塾生

ではなかったが、両親といっしょに千葉県から土曜会に参加した[13]。A は当時（1984 年 5 月の連休明け）、いじめられていたために行きしぶりがあり、週に数回、小学校を休んでいた。

この日の土曜会では A の不登校が話題となり、A の父親が「学校ぐらいはどんなイヤなことがあっても、行かないと」と話すと、土曜会の参加者は「登校拒否は怠けでも、甘えでもないのよねえ。その子にはその子のとっても辛い事情だってあるんですもの」と話した。A は「両手をスカートの下に敷き、オカッパ頭を前に垂れ、足だけはブランブランと漕ぎながら」「教室の隅っこに一人離れて座っていた」（八杉 1985b, pp.10-14）。

土曜会から数日後、A の母親から八杉に電話があり、A が小学校に行かなくなったという報告と、A が希望するので東進会に入れていただきたいという申し出があった。八杉は「〝登校拒否〟といってもここ三、四日のことだ、そのうち何とかなるかもしれない……千葉県から五年生の女の子が通い続けられるわけもない……一、二回通塾しているうちに考え直すかも知（ママ）れない」と考え、了承した。

通塾には片道 2 時間余りを要したが、A は通い続けた。当初は週 2 日であったが、A の希望により週 5 日通うようになった。それでも A は休まなかった。

A の両親も欠かさず土曜会に参加し、他の保護者たちと交流した。A が受けたいじめや、小学校の教師たちの無理解について話すこともあった。当時、土曜会には A の両親のほかにも学校に行っていない子の保護者が参加していた。八杉は、不登校生の保護者たちが「それぞれに苦しい親子の体験を持つ者同士だったから、お互いに力づけ、励まし合ってはいるのだが、子どもが学校へ行っている親御さんたちとも、何のへだたりも感じないでお互いに近づき、お互い理解しようとしている姿には、ぼく自身嬉しくなった」（八杉 1985b, p.32）と述べている。

A が 6 年生になるのを機に A の一家は千葉県から東進会の近隣に引っ越した。A の父親は転校だけを考えていたが、新しい小学校に通学することによって東進会に通えなくなることを A が嫌がったためである。

6 年生になった A は新しい小学校に行った。八杉は A の母親からの以下のような電話があったと書いている。

> A の方から「A、学校へ行ってみようかしら」と言ったのだという。自信がないのでお母さんについて来てくれと。
>
> わが子の言うままに学校について行ってみると、A はたちまち下駄箱の並んでいる前に立っただけで全身がガタガタ震え出した。――やっぱり無理だ――と見てとったお母さんは、「無理だったら帰ってもいいのよ」と連れて帰ろうとした。
>
> ところが、A は蒼い顔をして、キッと何かを見つめる目つきになり、お母さんに「一人で帰って」と言ったという。
>
> その日、ぐったり疲れたような様子で学校から帰って来たが、お母さんは「おかえり、ごくろうさま」と言っただけで、何も尋ねなかった……「行かれなくなったらそれでもいいですから、そーっとして、あの子にまかせてみようと思ってます」
>
> お母さんはそう言うと、「これからもどうかよろしく」と電話を切った。（八杉 1985b, p.42）

新しい小学校に初めて行った日も A は東進会に来た。漢字の読み方の授業が始まり、子どもたちは答えを当てようと口々に発言した。しかし、A はいつもより元気がなく、授業が始まってしばらくすると机に伏してしまい、授業が終わるまで眠り続けた。翌日も同様であった。

> それをみて、子どもたちはいろんなことを言った。
>
> 「先生、あの子寝てるよ。寝てていいの」
>
> 「いいんだよ、オマエも寝たかったら寝ていいよ」
>
> 「先生、先生、漢字の書き取りにしようよ。読みだと、うるさくてアイツ可愛想だよ」

Aが半開きの口でゴロンと机に顔を当てて眠っているのを見て、事情を知っている連中は「静かにして眠らせてやれよ」と言っていた。（八杉 1985b, p.44）

4月の土曜会は、A一家の歓迎会となった。八杉がAの新しい小学校について尋ねると、Aの母親はAの忘れ物のエピソードを話した。

この前も、例によって忘れものをした。ところが担任の先生は、「Aさんちは、そこでしょう。大きな声で呼んでごらん」と言ったのだそうだ。
Aさんの新しい家は、B小学校と背中合わせで、おまけに、学校の家庭科室とAさんの家の居間が塀一つ隔てただけ。
「お母ーさーん。キョーカショ！」
と、Aちゃんが塀の上へ身を乗り出して呼ぶと、クラスの何人かの女の子も仲間になって覗くという。
「Aちゃんのお母さーん。こんちわーァ」と合唱しても、先生はニコニコしながら眺めているだけだと。
「前の学校じゃ、とっても考えられないことです」
学校がひけるとドヤドヤ友だちが訪ねて来たり、例の塀覗きの洗礼で驚かされたりはするけれど、何となく家庭的でいい雰囲気だと、お母さんは言う。（八杉 1985b, p.50）

Aの母親の話を聞いて「よかった、よかった」と土曜会の参加者が言い合っていたなか、Aの父親が口を開いた。

Aは、この一年、学校を捨てた。私等も捨てた。そして、自分の子は塾で育った。精神的にも甦った。そのことは忘れない。しかし、それですべてよかったかどうかは、わからない。Aや、わが家は救われたかも知れないが、いまでも、辛い思いで学校に行き続けている子、逆に、登校拒否をして、一歩も外へ出られない子も大勢いることも考える。塾へ行かれたり、転校することが可能な子や家庭はいい。が、逃げられない人、塾にさえも外出できない子のことを考えなければいけないと思う……そういう親や子たちに対して、済まないような、応援したいような気持ちがある……学校にべったり頼ったり、まかせ切るのはよくないと思う。学校や世間がおかしければ自前で親がわが子を護るのはあたりまえ。しかし、いや、だからこそ、学校へ行くか行かないかで敵味方になるようなことだけはしたくない（八杉 1985b, p.51）

このようにAの父親は訥々と話し、「これからそういう辛いおもいをしている人達に何か役立つ自分でありたい」と結んだ（八杉 1985b, p.51）。
握手し合う参加者たちを眺めながら、八杉は2人の保護者に視線を移した。2人の子どもたちは2年以上、学校に行っていなかったが、楽しそうに語り合っていた。

（2）考察――教育を問い直す場としての補習塾

このAの事例の重要な点として以下の4つを挙げることができる。
第1に、東進会が不登校の子どもを受け入れ、他の塾生たちも不登校の子どもの状況を理解していたことである。「学校外で学ぶ子の支援塾全国ネット」加盟塾である東進会には、「不登校児」や「学力不振児」が通っていた。受験に向けて競争し合うのではなく、日常の授業をはじめ、食事会やキャンプ、学期末の行事などの時間を共に過ごす仲間であった。
第2に、保護者が語り合う場として土曜会が開かれていたことである。Aと両親が初めて参加した土曜会で、他の参加者が「登校拒否は怠けでも、甘えでもない」と言ったことをAは教室の隅っこで聞き、初めて自らの理解者を得た気持ちになったであろう。他の保護者との交流はAの両親にも影響を与えた。学校復帰を強いるのではなく、「あの子にまかせてみようと思ってます」という子どもの意志を尊重する保護者の姿勢が、転校後のAの小学校通学を支える重要な要因の一つとなったであろう。

第 3 に、東進会が教育を問い直す場になっていたことである。不登校の子どもを受けて入れていたが、再登校に向けての指導の場ではなかった。自身の子どもが再登校・進学できれば、それで良いということでもなかった。学校に行っている／行っていないという状況に関係なく、土曜会では保護者たちが教育について共に考え、語り合っていた。

そして第 4 に、このような場づくりによって不登校生支援がなされていたことである。A は他の生徒と同様に塾に通っていただけであり、学校復帰に向けての特別な指導を受けていたわけではない。また、A の保護者もカウンセリングなどの特別な対応を受けていたわけではない。しかし、東進会が子どもの個性が尊重される場であったことから、A とその保護者は他の塾生や保護者との交流のなかで受けとめられ、自ら事態を打開することができた。これは八杉のリーダーシップによるものではなく、A が継続的に東進会に通い、近隣に引っ越し、新しい小学校に通うようになることは八杉にとっても想定外であった。

近年の不登校生支援が仮に、該当児童生徒のアセスメント、カウンセリング、コーチング、目標設定、叱咤激励、PDCA サイクルといったもので構成されているとするならば、八杉の実践は対極に位置するものである。再登校のための PDCA サイクルは、結局は当事者の主体性を軽視した手練手管に過ぎないとも言える。A の事例は、八杉の指導による学校復帰成功事例ではなく、東進会という場が期せずして A たちの主体性を引き出す力を持っていた点に、その特質があると筆者には思われる。A の学校復帰は副次的産物であり、教育を問い直す主体性が補習塾において共同的に生成されたことが最も重要なのである。

おわりに

本稿では、八杉晴実に着目して、補習塾における不登校生支援を考察した。「乱塾時代」（毎日新聞社会部 1977）とも呼ばれた状況のなかで、八杉は受験対策を目的とせず、「本当の学びの大切さを、できる子できない子とともに一緒になって追い求める塾」を目指した。

遠山啓に力づけられながら、「わかる子をふやす会」を 1974 年に結成し、「落ちこぼれ」の子どもたちの学力保障に力を注いだ。

1980 年代には自らの塾で、不登校の子どもを受け入れ、1985 年には「学校外で学ぶ子の支援塾全国ネット」を結成した。これらは、フリースクールや教育支援センターに先行する重要な実践であったと評価できる。

そして、A の事例で考察したように、八杉の不登校生支援は単に学校復帰を目的とするものではなかった。補習塾は、子どもたちが互いを気づかいながら学び、保護者たちが語り合いながら教育を問い直す場であった。

今日においても学校に行かない子どもたちへの支援が非常に重要な課題となっているが、再登校だけが唯一の選択肢であれば、学校に行かない子どもたちの困難は深まるであろう。学校外の学びの場が彼らの困難を軽減することが期待される。そして、学校外の学びの場においては、再登校に向けての指導ではなく、彼らの主体性を生成することが最も重要であると考えられる。

【註】

(1) なお、不登校の名称は時代や論者により異なるが、本稿では引用を除き「不登校」と呼ぶことにする。「不登校」の名称変化については、加藤（2012）が戦後初期の長期欠席から、学校ぎらい、登校拒否、不登校までを詳述している。文部省の公式文書において「不登校」が初めて使用されたのは 1990 年である（保坂 2000, p.15）。学校不適応対策調査研究協力者会議の中間まとめで「登校拒否（不登校）」と表記され、同会議の最終報告（1992 年）において以下のように定義された。「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にあること（ただし、病気や経済的な理由によるものを除く）」。この定義は現在に至るまで踏襲されている。学校基本調査では 1998 年度から「学校ぎらい」に替えて「不登校」が採用された。

「補習塾」という用語については、今津(1975)は「塾」を「学習塾」と「おけいこ塾」に分け、さらに「学習塾」を「進学塾・進学教室」と「補習塾」に分けた上で、以下のように定義している。「学歴社会における競争激化のために学校での学習だけでは足らなくなり、進学準備の欲求を学校で満たすことのできない親たちが子どもを進学塾へ通わせるとすれば、競争にまきこまれた学校で授業についてゆけない子どもが利用するのが補習塾である」(今津 1975, p.62)。本稿では「補習塾」について、この定義を採用する。

(2) 「支援塾全国ネット」と略されることも多かったが、発会式を伝えた『朝日新聞』(1985 年 4 月 24 日東京朝刊 12 面)では「学校外で学ぶ子の支援塾全国ネット」と記述しているため、これが発足時の正式名称と考えられる。なお、1990 年に「子ども支援塾ネット」に改称。

(3) 八杉の呼びかけによって 1985 年に発足(八杉 1990a)。『読売新聞』(1986 年 6 月 4 日 9 面)によれば、発足から約 1 年で会員は 1000 人を超えていた。

(4) 八杉(1990a, p.46)参照。なお、八杉は「補習塾」や「支援塾」の明確な定義は示していない。前述の「学校外で学ぶ子の支援塾全国ネット」入会案内や八杉の著作を参照すると、受験対策を主目的とする大規模な塾(=「進学塾」)とは対照的な存在として、「補習塾」や「支援塾」を捉えていたと考えられる。「補習塾」と「支援塾」の違いも明確には示されていないが、「支援塾」は「不登校児」「学力不振児」への支援を強調して用いられているように見受けられる。

「学校外で学ぶ子の支援塾全国ネット」に加盟した団体の自己定義は不明であるが、関連資料(八杉編 1985a, 八杉 1990ab など)を見る限りでは「補習塾」(=受験対策を主目的としない小規模な塾)と呼び得る団体が多いように思われる。八杉は「呼びかけに応じてネットに参集した人たちの塾は、一般的には〝補習塾〟という色彩が強く、……前からすでに私塾で子どもとかかわっていた人たちがほとんどで、いわば補習塾のヴェテランたち」(八杉 1990b, p.123)と述べ、補習塾での学習の特徴として「少人数制、対話式、家庭的、少量をじっくり、基礎・基本中心」(八杉 1990b, p.125)を挙げている。

(5) 八杉の生い立ち(10 歳のときに父を亡くしたことや大学進学の経緯など)については『人間が好き』(八杉 1983b)で述べられている。以下、八杉に関する記述は主に同書を参照した。

(6) 当初は「東京進学指導会」という名前であったが、1966 年に 4 つの分教室を閉めた際に塾名を 4 文字削って「東進会」に変更した(八杉 1983b, p.54)。経営拡大によって八杉と子どもたちとのつながりが薄れたことを反省し、それ以後は分教室を構えずに自宅の 1 階を教室としていたようである。

(7) 八杉は批判的に言及しているため「T 私塾会」と表記しているが、これは東京私塾会を指していると考えられる。

(8) なお、遠山は東京工業大学退職後に、本格的に子どもたちへの算数教育を実践しており、晩年には「遠山真学塾」を開設している(佐田 1980)。『ひと』においても塾への言及がある(遠山 1973)。

また、八杉は、遠藤豊吉が『学習塾』(遠藤 1975)で東進会に言及していることにも励まされた(八杉 1983b, pp.90-91)。遠藤は、つぎのように述べている。「学校のなかで権力からきれ、権力からきれることによって〈教師〉として自立する少数孤立者と、学校を包むぶあつい「国家」のなかで、権力からきれ、権力からきれることによって自立する、本来の意味における〈塾教師〉とが、今日をいろどる乱世の地平に〈幻〉の〈共和国〉を作らねばならぬ時代――それが「現代」なのだ」(遠藤 1975, p.364)。

(9) 管見の限り、八杉は「わかる子をふやす会」についてのまとまった記録を書いていないため、同会の活動については主に天野(1985)を参照した。中央学習教室という塾を自営していた天野秀徳は「わかる子をふやす会」の世話人であった。1985 年時点で、「わかる子をふやす会」の会員数は 180 名、構成比は塾教師 3 割、学校教員 2 割、保護者 4 割、その他 1 割であった。

(10) 内田良子、佐々木賢、松崎運之助、奥地圭子は『さよなら学校信仰』(八杉編 1985b)に寄稿している。

(11) 『学力おくれ学校ぎらい』(八杉 1985a)には、八杉に寄せられた相談が多数掲載されている。

(12) 原文では子どもの名前が記載されているが、個人情

報保護のため「A」に変更した。また、副題にも名前が記載されているため、副題を省略した。小学校名は、「B 小学校」に変更した。

なお、『かけこみ塾ふれあい日記』（八杉編 1985）には、「学校外で学ぶ子の支援塾全国ネット」加盟団体の実践記録が掲載されている。

(13) 参加の経緯は書かれていないが、著書を多数刊行し、マスメディアにも取り上げられていた八杉が、さまざまな相談に応じていたため、A の両親が著書やマスメディアを通じて八杉を知り、連絡したと思われる。

【文献】

天野秀徳（1985）「「わかる子をふやす会」の十年」八杉晴実編『さよなら学校信仰――自前の教育を求めて』一光社 , pp.233-247.

遠藤豊吉（1975）『学習塾――ほんとうの教育とは何か』風濤社 .

保坂亨（2000）『学校を欠席する子どもたち――長期欠席・不登校から学校教育を考える』東京大学出版会 .

今津孝次郎（1975）「塾の社会学」仲村祥一編『社会学を学ぶ人のために』世界思想社 , pp.53-72.

石田宇三郎（1973）「編集会議報」『ひと』5, pp.76-77.

加藤美帆（2012）『不登校のポリティクス――社会統制と国家・学校・家族』勁草書房 .

毎日新聞社会部（1977）『乱塾時代』サイマル出版会 .

奥地圭子（2015）『フリースクールが「教育」を変える』東京シューレ出版 .

佐田智子（1980）「序列主義とのたたかい――みずからの生を考えさせられる」『ひと別冊（追悼特集号）遠山啓――その人と仕事』太郎次郎社 , pp.184-189.

高木志づゑ（1973）「編集会議報」『ひと』8, pp.37-38.

遠山啓（1973）「塾の思想――義務か、権利か」『ひと』11, pp.4-12.

八杉晴実（1975）『先生、塾は悪いのですか』昌平社 .

――――（1983a）『甦れ笑顔――地域の小さな塾からの報告』啓明書房 .

――――（1983b）『人間が好き――塾 東進会の学び・愛・喜び』新声社 .

――――（1985a）『学力おくれ学校ぎらい』教育史料出版会 .

――――（1985b）「学校の外の風景」八杉晴実編『さよなら学校信仰――自前の教育を求めて』一光社 , pp.9-52.

――――（1990a）『全国子ども支援塾ガイド――ビューティフル「家族ネットワーク」の広がりのために』一光社 .

――――（1990b）「補習塾の役割――勉強の遅れた子のために」『児童心理』44(3), pp.443-447.

八杉晴実編（1985a）『かけこみ塾ふれあい日記――学校の外で学ぶ子どもたち』有斐閣 .

――――（1985b）『さよなら学校信仰――自前の教育を求めて』一光社 .

Support for Non-Attending Students at Cram Schools in the 1980s: Focusing on the Practice of Harumi Yasugi

Yuya Tanaka

From the 1990s on, extramural learning spaces such as free schools and educational support centers (adaptation guidance classrooms) have flourished; in the 1980s, their role of accepting students not attending school was played by cram schools. This paper considers the support for non-attendees provided by cram schools in the 1980s, with a focus on Harumi Yasugi, who established the "National Network of Support Schools for Children Learning Extramurally."

As shown in the case of elementary school student A which the paper discusses, Yasugi's support for non-attendees was not directed simply at having them return to school. His cram school was a place where students could learn with care for one another, while their parents shared one another's stories and questioned the nature of education.

If we allow that support for non-attendees in recent years has been composed of assessment, counseling, coaching, goal setting, chiding and encouragement, and the PDCA cycle for the students involved, Yasugi's practice was at the opposite extreme. The PDCA cycle used for a return to school is no more than rote training which dismisses the students' subjectivity. The case of A is, rather than a success story about returning to school thanks to Yasugi's guidance, characterized by the capability of Yasugi's cram school unexpectedly to evoke A's subjectivity and that of their family. A's return to school was a secondary result; the essential point was the joint generation at the cram school of subjectivity questioning education.

Support for children not attending school remains a major issue today, but if the only option is a return to school, their struggles will only become worse. It is important, in extramural learning spaces, not to guide them toward returning to school but to enable the generation of their subjectivity.

Keywords: cram school, non-attendance (school refusal), poor academic results (drop-outs)